

「僕が体験した土砂災害」

徳島県 つるぎ町立貞光中学校 1年 ^{みはら}三原 ^{けいと}啓人

夏から秋にかけて発生する台風。日本では様々な場所でその被害を受けています。

僕の住む一宇も山間部で、台風の被害を受けることは多いようです。僕が小学5年生の時です。大きな土砂崩れが起きました。それも、台風は過ぎていき、川の流れも澄んで落ち着いていたときです。

それで、僕は祖父との約束の魚釣りに行くことにしました。祖父は僕を学校に迎えにきてくれ、家に帰ると準備をしていき、早速祖父の車で出掛けました。自宅を出て1分ぐらいでしょうか、地響きに驚きました。祖父と僕は車から降りて安全そうな場所へ逃げていきました。今走っていた道路が土砂に埋まっています。今まで聞いたことのない地鳴りに土砂崩れ、杉の木がバリバリと倒れていくすさまじい光景を見て、立ちすくむことしかできませんでした。

さっき通っていた道が、数分のうちに、こうらふうな状況になるということが信じられませんでした。恐ろしさに寒気がしました。

夕方、その周辺は大渋滞になりました。自宅に帰れず「どうしよう。」と悩む人、役場の職員さんに、駐在所の警察官のように仕事をしている人、みんな携帯を持って連絡しています。この道は、こんなにたくさんの人が利用しているのかと驚くばかりでした。

帰るための選択は二つしかありません。山道をただひたすら歩くか、2時間以上かけて迂回路を利用するか。

僕の両親も兄も自宅に帰ることができず、山道を歩いて帰ってきました。普段は誰も歩かない山道をたくさんの人が歩いています。土砂崩れの場所は24時間ガードマンが警戒して、まぶしいくらい明るいライトで照らしています。何度か起こる土砂崩れの状況を確認し、むやみに通過しようとする人を止めて、誘導したりと安全の確保に懸命です。

次の朝、災害現場では地元の建設業者さんがたくさんの機械を持って土砂の撤去作業をスタートしましたが、度々起こる土砂崩れで仕事もスムーズには進まないようでした。安全性を考えながら住民のために作業し、夕方には人が歩いて通れるようになりましたが、ガードマンの人が落石に注意し確認しながら住民と歩いてくれました。危険を感じると通過するのは中止となりました。

3日後、やっと学校に登校できるようになりましたので災害現場まで校長先生が迎えに来てくれましたが、細くて岩がごろごろ落ちた道を通るのは恐怖でした。学校に到着したらまた道路が崩れて帰れなくなるのかと不安になってきます。このような生活は2週間続き、いつものように登校できるようになったときはホッとしました。

一宇地区から貞光地区の区間はとても危険な場所ばかりです。中学校への通学、買い物そして病院と、その道は一番の生活道で、一宇地区住民の大切な道です。しかし、台風が来ると道路には落石あり、谷からの激しい濁流。そのため車に落石し怪我をしたとか、故障したとか被害が発生しています。

山の斜面を眺めると、今にも岩が転がり落ちてきそうで怖くてなりません。ここは、町の危険地区と指定されているようです。去年の洪水の際には、避難勧告が発令され、地域の人と避難しました。降る量が多くなると、ダムの放流が始まり、あっという間に、川は濁っていきました。すごい雨で放流のサイレンが何度も鳴り響き、役場の方から避難してほしいという連絡が入りました。毎年のように同じようなことがあり、心配はつきませんが、一宇地区の自然の豊かさや清らかな川に囲まれた生活をするのは大好きです。この住民の方々も同様だと思います。

今回の体験を通して、災害は絶対に忘れてはいけません。「天災は忘れたころにやって来る」ともいいます。気をゆるめずしっかり普段から気を付けておくのが重要だと感じています。

平成 25 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

まず、真っ先にとるべき行動は、地滑り地区の把握とその状況を調べること。洪水の被害を出さないため川幅等の調査をすることなどたくさんあることでしょう。個人の力では、どうにもならないことです。だからこそ、町に県に土木の方、建設の方、環境の方などたくさんの方に頼っていき、最適な方法を見つけていきたいです。

だからといってハード面だけではダメです。ソフト面、人の心がけが必要なことです。いくらいい環境であっても人の協力がなければ意味がないのです。

この美しい一宇で心豊かに生活でき、災害が起きても一人の犠牲者も出さず避難していきたい。それには、温かい心の積み重ね合い思いやりの心が必要不可欠です。これからも住民の強い人間関係を作り努力します。